

有明海水産資源回復技術確立事業*

サルボウ種苗放流・追跡調査

坂本 浩毅・川名 拓里

有明海佐賀県海域におけるサルボウ漁は、ノリ養殖区画漁業権漁場とほぼ重なる漁場で、ノリ養殖の副業として春季から夏季に行われる重要な漁業である¹⁾。

佐賀県におけるサルボウの漁獲量は、平成初期は1万トン以上であった。その後、平成10年以降は豊凶を繰り返しながらも一定の漁獲量を維持していたが、令和2年7月の豪雨等、近年、梅雨時期に発生する豪雨の影響により海域が低塩分化することによる大量減耗が発生し、令和3年度漁期は、一部の地区のみの漁獲、令和4～7年度漁期は、県全域で休漁となっている。

この状況を受け、令和5年度から、有明海水産資源回復技術確立事業を活用し、サルボウ稚貝の放流を実施しており、本報では、今年度実施した放流の概要とその後の追跡調査の結果を報告する。

方法

今年度の放流は、2025年12月に地点A(七浦沖合)と地点B(七浦沿岸)で実施した(図1)。放流に用いた稚貝は、公益社団法人佐賀県玄海栽培漁業協会、佐賀県有明水産振興センター(以下、センターとする)で採卵し、佐賀県有明海漁協大浦支所で中間育成された220.1万個と、(株)二枚貝養殖研究所(長崎県佐世保市)で生産された101万個の計321.1万個を放流に用いた(平均殻長約2～10mm)。

R7年度放流群の追跡調査を目的として、地点Aおよび地点Bの両地点において、放流個体の一部を殻長のおおよその区分に基づき、2mm区、5mm区、10mm区の3試験区に分類し、食害および散逸対策としてカゴおよびネットに収容したものを付近のカキ養殖施設に設置した(図2)。また、令和5年度および6年度に放流したサルボウの追跡調査中の個体について、沖合区はカゴとネットに収容し、昨年度まで沿岸での放流・追跡調査地点としていた地点Cは(図1)、令和7年3月の調査よりコンテナ式に変更し(図3)、追跡調査を実施した。調査は月に1回程度、殻長及び生残率の測定を行った。

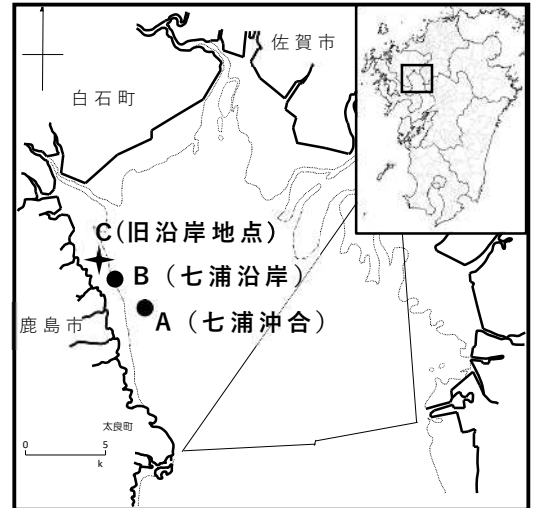


図1 放流地点図



図2 地点Aの追跡調査用カゴ



図3 地点Bの改良版調査用コンテナ

令和5年度に放流したサルボウは産卵期である6月および7月に産卵母貝の目安となる殻長25mmに達していたため、各試験区から数個体サルボウを採集し、グリコーゲン含量の測定および生殖腺成熟度の判定を行った(グリコーゲン含量は佐賀大学、生殖腺成熟度の判定はマリノサーチ株式会社にそれぞれ委託した)。

結果

令和5年度に放流したサルボウの各地点の生残率及び平均殻長の推移について、図4、5にそれぞれ示した。

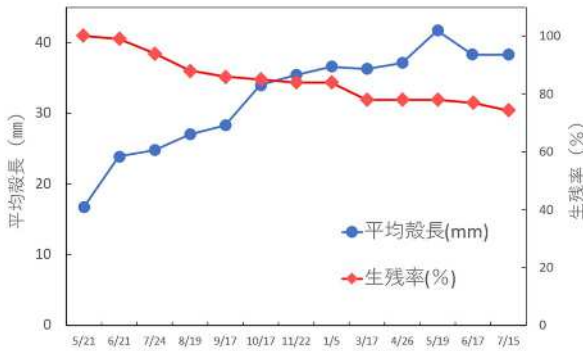


図4 R5年度地点Aの生残率及び平均殻長の推移

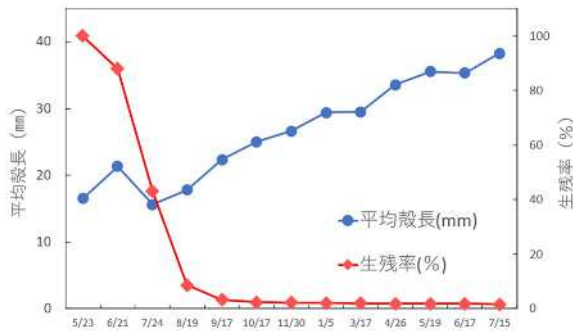


図5 R5年度地点Cの生残率及び平均殻長の推移

サルボウ稚貝の生残率は、2025年7月時点で地点Aでは生残率74%、地点Cでは1.6%となった。平均殻長は、地点Aで38.3mm、地点Cは38.3mmとなった。

令和5年度に放流したサルボウの令和7年6月と7月におけるグリコーゲン含量のグラフを図6に示した。

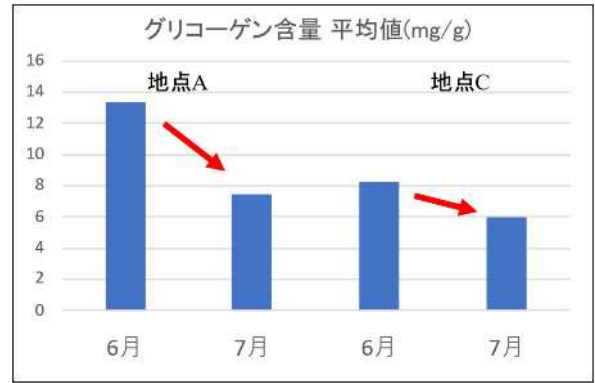


図6 R5年度サルボウのグリコーゲン含量

地点A、地点Cのグリコーゲン含量および生殖腺の成熟度の測定検査の結果、6月から7月にかけて地点A、地点Cの両地点でグリコーゲン含量の低下および生殖腺の発達または放卵・放精の跡が確認されたことから、性成熟の後、産卵が行われたことが示唆された。

また、7月に一部個体をセンターに持ち帰ったところ、産卵が確認されたことから、放流個体が母貝として機能することが確認された。

令和6年度に放流したサルボウの各地点の生残率及び平均殻長の推移について、図7、8にそれぞれ示した。

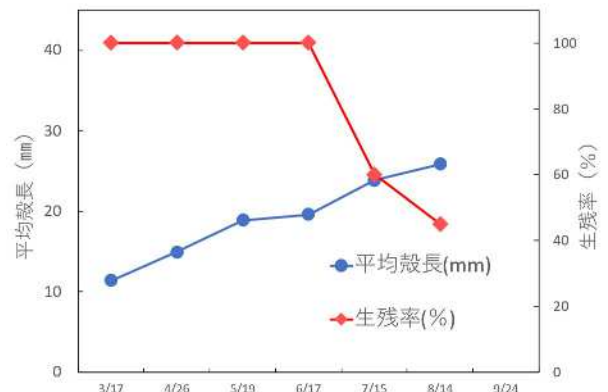


図7 R6年度地点Aの生残率及び平均殻長の推移

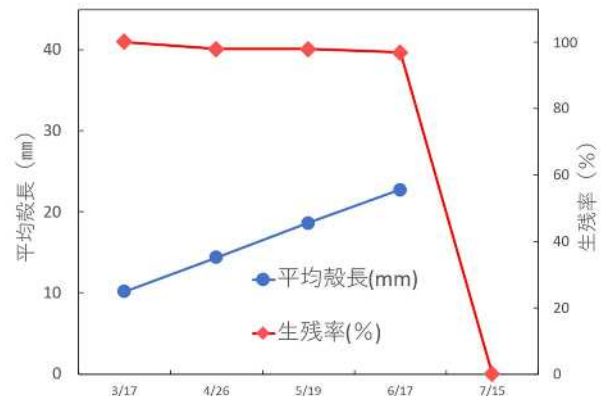


図8 R6年度地点Cの生残率及び平均殻長の推移

サルボウ稚魚の生残率は、地点Aは8月時点で平均殻長25.85mm、生残率45%であったが、9月の調査時に、サルボウ種苗を収容したカゴの流出により調査を終了することとなった。地点Cは順調に成長し、6月には平均殻長22.77mmとなったが、7月に高温が原因と思われるへい死により全滅した。この結果を受けて、地点Cは放流には不適と判断し、今年度の沿岸部の放流は地点Bで行うこととした。

令和7年度に放流したサルボウのA地点の生残率及び平均殻長の推移について、図9に示した。

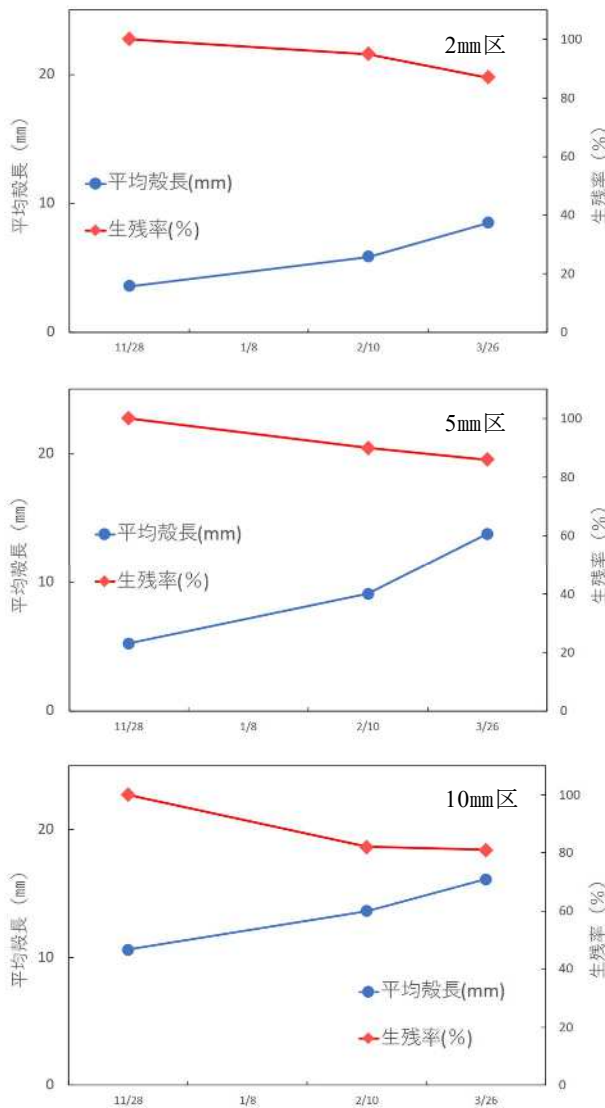


図9 R7年度地点Aの生残率及び平均殻長の推移

2026年3月時点で、地点Aのサルボウ稚魚の生残率は、2mm区で95%、5mm区で86%、10mm区で81%となった。平均殻長は、2mm区で5.84mm、5mm区で13.78mm、10mm区は16.13mmとなった。

令和7年度に放流したサルボウのB地点の生残率及び平均殻長の推移について、図10にそれぞれ示した。

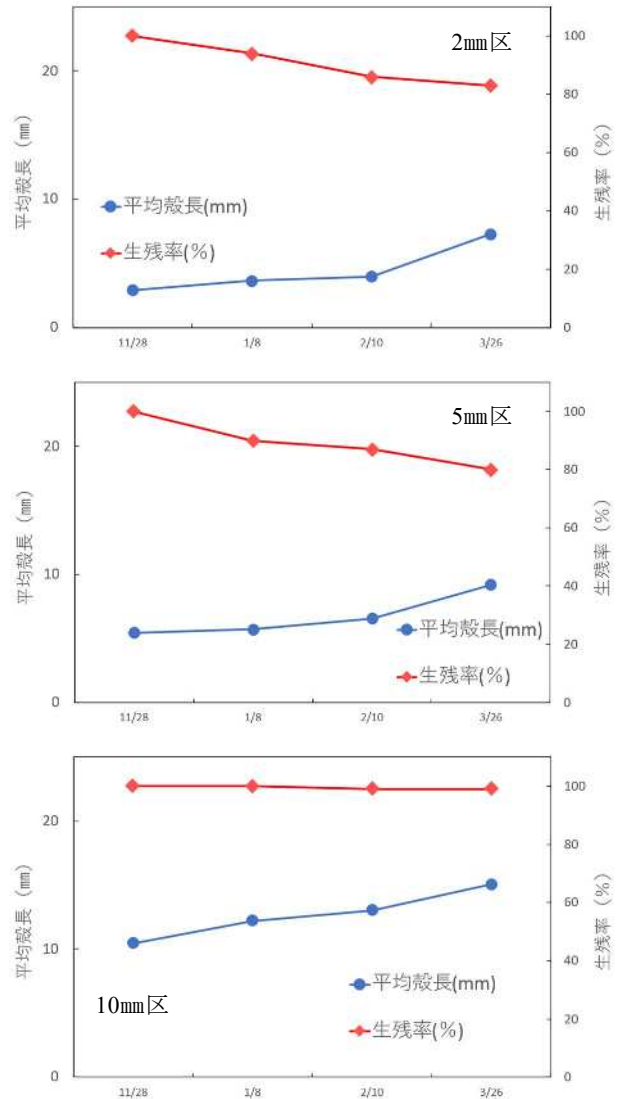


図10 R7年度地点Bの生残率及び平均殻長の推移

2026年3月時点で、地点Bのサルボウ稚魚の生残率は、2mm区で83%、5mm区で80%、10mm区で99%となった。平均殻長は、2mm区で7.28mm、5mm区で9.19mm、10mm区は15.06mmとなった。

文献

- 1) 真崎邦彦・小野原隆幸(2003): 有明海湾奥部におけるサルボウ漁獲実態と分布状況。佐有水研報, (21), 29-36.